

令和 4 年 5 月 22 日現在

機関番号：32311

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K14087

研究課題名（和文）社会の複雑性を演出する「多視点的授業」の原理と方法

研究課題名（英文）Principles and methods of "multi-perspective lesson" (Mehrperspektivischer Unterricht) for produce social complexity

研究代表者

田中 怜 (Tanaka, Rei)

育英大学・教育学部・講師

研究者番号：30835492

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「活用」型の授業モデルを克服するために、西ドイツにおいて取り組まれた「多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht: MPU)」に着目し、それが試みた授業における複雑性の演出方法を解明することを目的とした。この目的を達成するために、本研究ではドイツにおけるMPUの一次資料の収集やインタビュー調査などを実施した。これにより本研究は、MPUの授業づくりや教材づくりの理論的基礎と具体的実践事例を解明するに至った。特に、それが「演劇」のメタファーを授業づくりの根幹に据えることで、現実の複雑性を授業で再提示することを基本的特徴としていることを実証するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、目下のところ隆盛を博している授業における「活用」志向の限界と、それに代わるオルタナティブな授業づくりとしてMPUに着目し、社会の複雑性を授業の中で演出する理論的な基盤と具体的な方法を解明した。こうした本研究の成果は、学校の中で教え学ばれる知識や技能を学校外の文脈でも使用可能にする(ことができる)という、「活用」志向の授業改革の前提を問い直すものであり、教育方法をめぐる議論に新たな視点を投じるものであろうといえる。また「活用」志向の限界の先に、社会の複雑性を演出するための授業モデルや教材の具体を示すことで、MPUを学校において実践するための参照先を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was through focus on the "multi-perspective lesson" (Mehrperspektivischer Unterricht: MPU) that was undertaken in West Germany to overcome the competency-based teaching model, and to figure out the methods of producing complexity in the classroom.

In order to achieve those purposes, this study collected primary sources and conducted interviews in Germany.

As a result, this study has come to elucidate the theoretical basis and specific practical examples of MPU lesson and teaching material. In particular, the study demonstrated that the basic characteristic of MPU is to re-present the complexity of social reality in the classroom, by placing the metaphor of "drama" at the core of its lesson creation.

研究分野：教育方法学

キーワード：ドイツ教授学 多視点的授業 学校論 コンピテンシー 演劇論

1. 研究開始当初の背景

(1) 複雑化する社会を背景として、「コンテンツベース」から「コンピテンシーベース」への転換が求められてきた。これにより、知識を単に学習するだけでなく、それを実生活で活用する能力の育成が、学習指導要領をはじめとする教育政策、それに共振した教育学研究、そして公共の教育言説の各所で強調されてきた。これと軌を一にして、生活世界の文脈に即した「真正の学習」や、学習者の主体性・能動性を重視した「アクティブ・ラーニング」、あるいは様々な生活場面で役立つ「汎用的スキル」が、知識の活用の手立てとして注目を浴びた。そして学校の授業をめぐっては、知識を実生活において積極的に活用する、「活用」型の授業モデルが教育方法上の常識(コモンセンス)と化しつつあった。

(2) こうした「活用」型の授業モデルは、複雑化する社会というイメージや教育政策上の転換に下支えを得ることで、一見すると異論を差し挟む余地のない説得力を備えてきた。ところが知識の活用を授業で促すことは、その意義の自明な所与性にもかかわらず、実際のところは学校と生活の間の接続問題という観点から一種のジレンマも抱えてきた。それは、複雑で流動的で多面的な社会現実(生活)を、授業では単純化されたパッケージとして構成せざるをえないという葛藤である。すなわち、一方では「グローバル化」や高度な「情報化」といった符号で現代社会が極度に流動的で可変的であることが強調される。学校の授業には、こうした複雑な生活現実に向けてその伝達内容と方法を調整することが要請される。しかし他方では、学校の授業は社会の複雑性をそのままに取り扱うことはできない。そこではカリキュラムの系統性の中に発見された特定の現実が恣意的に選択され、子どもたちの発達段階や既有知識に接続可能なよう教授学的に再構成される。いわば社会の複雑性は授業において特有な仕方です「縮減」されるのであって、それはしばしば「生活現実の単純化」を招き寄せる。

(3) かくして学校では生活現実の複雑性が除去され、単純化された条件下で知識の活用が促される。ところがこれにより学校での学習は複雑な社会の中で生きるための準備になるどころか、逆説的にも、複雑性の対峙からはますます遠ざかっていく(田中 2017)。ここに、社会の複雑性を扱いきれずに単純化する「活用」型の授業モデルの問題をみることが出来る。それでは、生活現実の単純化というこの問題を克服するために、社会の複雑性を授業で適切に演出することはいかにして構想・実践可能なのか。本研究の中心的な問いはここにあった。

2. 研究の目的

(1) 「活用」型の授業モデルの問題を乗り越えるために、本研究は「多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)」を検討対象として設定し、その原理と方法を明らかにすることを目的とした。これによって社会の複雑性を単純化することなく授業で適切に「演出」する方が取り出されるとの見通しがあったためである。

(2) 「多視点的授業」とは、1970年代に西ドイツのロイトリンゲン教育大学のグループが中心となり開発された事象科(Sachunterricht)のためのカリキュラム構想ならびに授業計画、実践のプロジェクトの総称である(CIEL Ag 1974)。その特徴は、生活現実を人間の認識によって構成された「多層的な再構成物」(同上:8)としてみなすことにある。ここにおいて現実には素朴な眼差しから把握可能な対象としてでなく、常に複数の「視点」から構成される複雑体として把握される。多視点的授業の重点は、現実を単純化して子どもに伝達することよりも、むしろこの現実を構成する視点の複数性や異質性を授業で演出することを通し、多視点的な眼差しでの現実理解を促すことに置かれていた。

3. 研究の方法

(1) 上掲の研究目的を達成するために、本研究ではドイツ各地に残された多視点的授業に関する一次資料や実践記録、ならびに関連する文献の収集と分析、また関係者へのインタビュー調査を方法上の軸として設定した。

(2) 上記の方法に基づいて、本研究は以下の3点を具体的な研究課題として設定した。
1970年代の多視点的授業のプロジェクトは、生活現実を授業の中で複雑に(=多視点的に)再構成することで、どのような授業計画や教材を開発したのであろうか(検討課題)。

そうした多視点的授業の成果は、プロジェクト終了後の(西)ドイツにおいてどのように受け止められ、批判や継承がなされたのであろうか(検討課題)。

こうした多視点的授業において、生活現実を授業で複雑なかたちで「演出」する原理はどのようなものとして設定されていたのであろうか(検討課題)。

本研究では、COVID-19の世界的な感染拡大による若干の調査予定の変更が生じつつも、概ねこれら～の検討課題に即して3年の期間で研究が遂行された。

4. 研究成果

(1) 多視点的授業の授業計画や教材はどのようなものとして構想されていたのであろうか(検討課題)に対する研究結果

検討課題 の達成のために、本研究の初年度に集中して多視点的授業に関する一次資料の収集を開始した。インターネット経由での文献の購入や、所属大学のレファレンスサービスの利用を通して、入手可能な範囲での文献を網羅的に収集した。しかしこの時点で多視点的授業のプロジェクトの実施から既に約半世紀が経過していたこともあって、半分以上の一次資料が国内では入手困難であることが判明した。

そのため2020年2月17日から27日にかけて、ドイツのライプツィヒを中心に現地に渡航した。ライプツィヒではライプツィヒ大学教育学部の研究者と研究交流を行ったほか、ドイツ国立図書館のライプツィヒ館にて数日にわたり日本国内では入手不可能な文献の複写作業を行った。また25日にはギーゼンに移動し、現地でルートヴィッヒ・ドゥンカー教授に対し3時間超のインタビュー調査を実施した。ドゥンカー教授は多視点的授業のプロジェクトに部分的にかかわり、1980年代以降に多視点的授業の批判的継承と発展に従事した当事者である。ドゥンカー教授からは、図書館にも所蔵がされていない多視点的授業の教材や教具の提供も受けた。

以上の調査に基づき分析を進め、多視点的授業のプロジェクトにおいて取り組まれた7つの行為分野(生活現実として措定された社会の諸断片)のうち「誕生日」に焦点をあてて教材と授業計画、そしてその背後で機能する教授学的な理論の中身を明らかにした。そこでは誕生日という自明な日常現実が意図的に授業の主題として取り上げられることで、誕生日が果たしている種々の社会的な役割が反省的に伝達内容として再構成されようとしていた。また多視点的授業のプロジェクトでは、こうした試みが授業において活用可能な教材としても具体化されており、分析を通してそれらの教材の機能を使用方法和併せて明らかにすることができた。さらにこれら教材が、多視点的授業においては授業を遂行するための授業計画に練り込まれていること、またそこにはプロジェクトにおいて構想されていた独自の教授学理論が同時に用いられていることも判明した。こうして検討課題 に対して「誕生日」の教材に着目して資料の分析を進めたことにより、本研究では多視点的授業では教材 授業計画 教授学理論の3者が相互連関の関係にあることを明らかにするに至った。

これらの研究成果をまとめて2021年に『育英大学研究紀要』(育英大学教育学部)に投稿した結果、学術論文として掲載された(田中 2022b)。

(2) 多視点的授業はプロジェクトの終了後にどのような発展を経験したのであろうか(検討課題)に対する研究成果

検討課題 に対しては、上記のドイツにおける文献収集やインタビュー調査を基盤としつつ、1980年代以降の(西)ドイツにおける多視点的授業に対する反応や受容、批判などに注目して「批判的発展」の内実を解明した。具体的には、1980年にルートヴィッヒ・ドゥンカーがゲルハルト・ホーベルガーとともに執筆した論考を分析の中軸に据えて、彼らが試みた多視点的授業に対する批判の論理と、その批判を踏まえて提案された代替案の中身を明らかにした。

その結果、多視点的授業に対しては1975年のプロジェクト終了直後から批判や提案が複数なされていたこと、そこでは授業において育成が目指されるべき「行為能力」概念の拡張が試みられていたことが判明した。ドゥンカーとホーベルガーは、当初の多視点的授業が掲げていた2つの行為能力(特定行為能力と一般的行為能力)の不十分さを認識し、他所から既になされていた「批判的・実践的行為能力」の追加という提案を引き受けつつ、さらに独自に「演技的・美的行為能力」の育成も必要であるとした。こうした彼らの構想は、当時提唱されていた授業案「服飾・流行」の中に見て取ることができる。それは、多視点的授業が掲げた4つの視点を新たに構想された4つの行為能力と掛け合わせた16の領域から構成された「教授学的枠組み」に依拠しており、服を着ることや買うこと、流行に敏感になることに対する多視点的な反省が授業のテーマとなっていた。

こうして獲得された知見を、2020年10月に日本教育方法学会第56回大会(於 宮崎大学)で発表した。また同様の内容を2021年に『育英大学研究紀要』(育英大学教育学部)に投稿した結果、学術論文として掲載された(田中 2022a)。

(3) 多視点的授業において現実の複雑性を「演出」する教授学的な原理はどのようなものであったのか(検討課題)に対する研究成果

以上の授業実践的(教材や授業計画)・教授学史的(多視点的授業の批判的継承の歴史)検討に加えて、第3の検討課題として、本研究は多視点的授業が生活現実の複雑性を授業において単純化することなく、むしろ多視点的に複雑な様態として「演出」するための教授学的な原理の内実に迫った。この作業を遂行するうえで本研究が主として着目したのは、多視点的授業に対する「教師中心性(Lehrerzentriertheit)」批判の諸言説とそれに対する応答可能性である。なぜならば、授業における複雑な現実の提示は教師による教材構成と授業計画の綿密な準備を不可避的な要件とする。ここに「教師中心的な授業」(=子ども中心ではない押し付け・詰め込みスタイルの授業)といった批判が巻き起こることは容易に想定可能であり、しかしまさしくそこに多視点的授業が試みようとした複雑性演出のための授業構成上の特徴を見て取ることができると考えられたためである。

本研究では、国内外の多視点的授業に対する同時代の評価を網羅的に収集・分析することで、そこに「教師中心性」批判という共通の傾向を捕捉することができた。そしてこの「教師中心性」批判のロジックを、「教師」「子ども」「教材」の3つの観点から分類し、それぞれの主張の基底

にある論理と主張同士の関係性を整理した。そのうえで、こうした「教師中心性」批判が実のところ多視点的授業のプロジェクトを牽引していた研究者自身によって既に自覚されていたという事実に基づき、批判に対する再批判の可能性を提起した。

その際に特に着目したのは、多視点的授業において多用されていた「演劇」のメタファーである。分析の結果明らかとなったのは、多視点的授業では授業を一種の「舞台」(学校・教室)上で織りなされる「俳優」(教師)と「観客・共演者」(子ども)との相互的な演劇として比喩的に把握していたということであった。こうした演劇のメタファーは、単に授業という営みを説明するために用いられていたことにとどまらず、それを越えて教師による生活現実の多視点的な再構成が単なる「教え込み」や「詰め込み」「インドクトリネーション」とは一線を画すかたちで構想されて左証である。

以上の研究成果を、2021年6月27日に日本カリキュラム学会第32回大会(於 琉球大学 web 大会)にて発表し、その後『カリキュラム研究』(日本カリキュラム学会)に投稿した結果、学術論文としての掲載が決定した(田中 2022c)。

以上の から の課題を検討した結果、とりわけ の検討課題との関連で、授業を「演劇」的な視点から捉えなおしていく「アート」としての授業像の再検討が次なる研究の方途として拓かれることとなった。

【引用・参考文献】

CIEL Ag (1974): *Stücke zu einem mehrperspektivischen Unterricht. Aufsätze zur Konzeption 1*. Stuttgart.

田中怜(2017)「プランゲの学校論における反省的学習(reflexives Lernen) 生活との差異に基づく学校教授構想の展開」『教育方法学研究』第42巻, 日本教育方法学会, pp. 23-33.

田中怜(2022a)「ドイツにおける多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)の批判的発展 理論モデルの拡大と授業案の開発に着目して」『育英大学研究紀要』第4号, 育英大学教育学部, pp. 1-18.

田中怜(2022b)「日常現実を多視点的(mehrperspektivisch)に捉える教材の理論と活用方法 『誕生日』をテーマとした教材開発の事例から」『育英大学研究紀要』第4号, 育英大学教育学部, pp. 19-34.

田中怜(2022c)「多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)における『教え』の演劇的解釈 1970年代西ドイツにおけるカリキュラム改革に対する『教師中心性』批判の再検証」『カリキュラム研究』第31号, 日本カリキュラム学会, 印刷中.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田中 怜	4. 巻 4
2. 論文標題 ドイツにおける多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)の批判的発展 理論モデルの拡大と授業案の開発に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 育英大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 田中 怜	4. 巻 4
2. 論文標題 日常現実を多視点的(mehrperspektivisch)に捉える教材の理論と活用方法 「誕生日」をテーマとした教材開発の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 育英大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 田中 怜	4. 巻 31
2. 論文標題 多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)における「教え」の演劇的解釈 1970年代西ドイツにおけるカリキュラム改革に対する「教師中心性」批判の再検証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Rei Tanaka	4. 巻 45
2. 論文標題 Concept and practice of multi-perspectives lesson (Mehrperspektivischer Unterricht) for connecting school and life : Analysis of theoretical framework and lesson practice in "Europa Project "	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bulletin of Institute of Education University of Tsukuba	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中 怜
2. 発表標題 多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)における「教え」の位置価 CIELプロジェクト(1971-1975)に対する「教師中心性」批判の再検証
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第32回琉球大学web大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中 怜
2. 発表標題 「教えのアートの教授学(Lehrkunstdidaktik)」における授業づくりの方法論 「教えのアート・ワークショップ」の仕組みに着目して
3. 学会等名 関東教育学会第69回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中 怜
2. 発表標題 ドイツにおける多視点的授業(Mehrperspektivischer Unterricht)の批判的発展 理論モデルの拡大と授業案の開発に着目して
3. 学会等名 日本教育方法学会(第56回大会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中 怜
2. 発表標題 学校と生活の接続方法としての多視点的授業 「ヨーロッパ・プロジェクト」における多視点的・対話的な授業の実践と理論モデルの発展に着目して
3. 学会等名 日本教育方法学会(第55回大会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rei TANAKA
2. 発表標題 Multi-perspectives Lesson (Mehrperspektivischer Unterricht) as didactical reconstruction of social reality
3. 学会等名 Trends and Issues of Educational Research in Kazakhstan, Russia and Japan
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中怜	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 330
3. 書名 学校と生活を接続する ドイツの改革教育的な授業の理論と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------